

ひな 鄙に生きる

大森が気付かせてくれる小さなもの、五感の大切さ
松場登美さんと納川の会

ひな 鄙に生きる

ゼロからのスタート

世界遺産となった石見銀山の中心地・大森。人口5000人に満たない谷間のまちは、一躍脚光を浴び、重要伝統的建造物群保存地区となっている町並みや遺跡群は、大勢の観光客で賑わっている。

ここに松場登美さんが、夫の大吉さんのUターンに伴い、名古屋からやってきたのは昭和55年。まだ、世界遺産の話など全くない時代、過疎化と高齢化が進む、山間の集落であった。

都会の感覚からは、何もないところ。しかし、登美さんは人情、自然、忘れ去られたような古い町家、そして町並みに魅力を感じ、

直感的に「生きる意味が見つかる」と感じたという。

しかし、生業としては、まさにゼロからのスタートであった。

小さいもの、捨てられるものへの眼差しとものづくり

高校生のとき、文化祭のバザーで、オリジナル紙袋を出したところ、評判となった経験を持ち、以後ものづくりがライフワークとなっていく。

大森に住み始めた登美さんにとって、財産は名古屋時代に作った端布であったという。端布を活かしてパッチワークを行い、その品物を大吉さんが広島や松江に持ち運び販売していった。しかし、売れる数は限られ、将来の展望はなかなか開けなかった。

空き家を活かした新たな生命「ブラハウス」の誕生

バブル経済のまっただ中、都会の華やかさとお金が世の中を覆い尽くす時代、あえて松場さん夫婦は自宅前の空き家を手に入る。崩れ落ちた壁土やガラスなどを片づけながら、2年の歳月をかけて「コミュニケーション倶楽部ブラハウス」が平成元年に完成した。「ブラ」とは、フィジー諸島で使われている気軽なあいさつ。そこには人が集まり、楽しみ、つながりを生む、店舗を超えた空間が意図されていた。

空き家を活かす「灯と暗闇の「ロウソクの家」」の誕生

ブラハウスを通じて体感した大森の町家の魅力。それは次なる歩みへのホップでもあった。自宅のすぐそばにあった空き家を購入し、

し、語り合いとてなしの場、電気も水道もガスも引かない「ロウソクの家」後の「群言堂」を生み出すことになる。

灯と暗闇の空間、そこで酒を酌み交わし、語り合う日々。自ずと視覚だけでなく、素材に触れ、匂いを嗅ぎ、味わい、四季折々の音に静けさを感じる暮らしは、五感とそれを大切にすることを呼び覚ました。

その中から、古いものに新しい息吹を息づかせる「復古創新」という新たなテーマ、そして大森の風景ととけあい、心地よく暮らす生活着のブランド「群言堂」が誕生する。同時に、空き家、古民家を、現代によみがえらすことの大切さと可能性に確信を得ることにもなった。

空き家を活かす

古民家の移築・「鄙舎(ひなや)」に込めた思い

銀山川をはさんだ大森の町家の向かいに、茅葺きの古民家「鄙舎」がたたずむ。隣には、石見銀山生活文化研究所(群言堂)のワークステーションが、昔からそこにあったかのように風景を醸し出している。

この古民家は、広島県甲山町(現、三次市)にあった築270年の豪農の住まいで、平成8年に移築。文化財級でありながらも、町が多大の経費のため保存を諦めた物件であった。それを平たく言えば衝動買い、それもワークステーション建設のために貯えた資金を使ってであった。そのおかげ

で、ワークステーションが完成するのは4年後になった。

しかし、この夫婦の直感力と行動は、新しい息吹を吹き込み、この地に根づくものづくりを一層強固なものにしていた。古民家とワークステーションは、一対に存在することになり、鄙舎はイベント会場や休憩の場、集会所、合宿所などとして、現代によりがえることになる。

空き家を活かす

新たな人の集まる場づくり

崩れかけそうな空き家の叫びは、またしても登美さんに届いてしまった。

県指定文化財と聞こえは良いが、天井や床の抜けた雨ざらしの

築230年の古民家・阿部家。

母屋、土蔵などと、何期にも分けて修復工事を行い、現在も進行形である。学校改築に伴う廃材、捨てられていた耐火レンガや農具・民具なども活かされている。それらは阿部家でよみがえり、昔からそこにあったようにさりげない。

登美さんは、この阿部家を通じて新たな人の集まる場、出会いの場を夢み、家本来の持つ力を引き出し、経済活動も出来ればと願っている。

ILPGから納川の会へ

話しは少しさかのぼるが、平成3年3月2日、本店2階で会津や妻籠、内子の人たちと酒を傾

けながら、語り合う機会があった。

その盛り上がりの中で、「大森を愛するシユプレヒコール」をしようということになった。翌3月3日の夕刻、およそ10人が集まり、それぞれの表現で「大森が好きだ」と大声を出しながら、通りを歩いた。少し前に自然発生的に発足していた、ILPG(石見地域デザイン計画研究会)の実質的な活動宣言でもあった。

ILPGは、夢を語り合い、個人がしたいことをメンバーが支え合う、この指止まれる自由な活動である。「鄙の雛まつり」も、「女性が輝くまちは素晴らしい、女性の意識が変われば、もっと暮らしが楽しくなる」という発言から生まれた催しである。10回目

の「鄙の雛まつり」の後の大宴会で、

松場さんの中国の友人から、納百川於海(「百川(ひやくせん)、海に納(おさむ)」)という名言を紹介された。「もともとは何もないところでも、小さな川や大きな川を数多く吸収することにより、広く美しい海になり、また、異質な川を多く吸収するほど、その海の美しさが増し、パワーが強くなる」ということだ。

宴会の話が具体化するすこさ、酒から生まれる活動が大森の真骨頂といえる。すぐにILPGは自然消滅し、「納川の会」が生まれ、時を待たずに平成15年5月にはNPO法人に認証される。



暮らしとまちのデザイン

石見銀山・大森



納川のごとく紡ぎ、繕い、織る。町家と暮らしと世代の絆。

「納川の会のメンバーは、大工、左官、設計者、電気屋、行政職員など、多種多様である。それゆえ、自分たちのスキル、さらにはネットワークで多くのことをこなすことができる。ただし、「欲しいのは銀行員、税理士、大金持ち」ということだ。

ミーティングは頻繁に阿部家や口ウソクの家で行われ、酒が入り、夢を語り、アイデアが生まれる。個人個人の発想や力をより出しやすくすることがNPO法人となるきっかけでもある。

「組織としての感覚や、何かをやらなければ、という意識は希薄だが、やめようと言ったこともない」関わりのスタンスはそれぞれだが、足を引く張ることはしない。「活動はブレだらけ。二つの芯で回っているのではない」「周知活動は余り行っていない」「周知活動は余り行っていない」

組織人間からすると、異邦人的な印象を受け、NPO法人として回っていくのかと、老婆心も起きないではない。が、それでいて人をひきつけ、動かすのは「まちづくりが先ではない。どんなな人生を送りたいのか。どんな暮らしが楽しいのかが大切」というベースがあるからなのかもしれない。

その具現化を目指し、柱として取り組んでいるのが空き家再生である。世界遺産になったとはいえず、町並みを歩くと、崩れかけそうな建物に出会う。空き家を甦らせる基本は住むことであり、住んでみたくなる魅力を引き出さねばならない。

それには市や県の支援も不可欠だが、「まち興し」と「まち鎮め」の考えも大切だ。前者は、人が成長し、次代が育つこと。後者は、土地の声を聞き、土地と会話すること、折り合いを付けることであり、遊び心を持って手を加えずにいいことであると、登美さんは言う。

若い世代による「おやじ育成委員会」ができ、父の日の前夜祭として「ファーザーズデイ・イブ」が、阿部家で開かれたことも象徴的だ。「大森に住みたい」というだけでなく、「自治会にも参加したい」という若者も育っているという。

阿部家の空間とそこで発想された営みは、町家と暮らしと世代の絆を、紡ぎ、繕い、織る、まさに「納川」なのである。

世界遺産と大森の暮らし、まちづくり

平成19年7月2日、ユネスコの世界遺産委員会において「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産に登録された。その効果は大きく、各種マスコミで大々的に取り上げられ、観光客も急増し、地域振興にとって大きな追い風となった。

一方で、世界遺産の目的である、人類共通のかけがえのない遺産として、未来に引き継いでいくことが不可欠である。また、谷間の狭い空間、住まいを中心としている町家にとつて、交通対策、観光と暮らしとの調和、環境保全も避けて通れない。登美さんの言葉を借りると、世界遺産のまち大森にとって、「まち興し」に加え、「まち鎮め」にどう取り組みかが、これからの大きな課題となる。世界遺産という大きな存

在だけでなく、人が住むところであることを再認識し、日々の暮らしを大切にすることで、世界遺産の新たなあり方を模索し、示すことも望まれる。

そして、盃を傾け、夢を語り、出会いやまちの魅力の（再）発見、大森を愛する心と守ること、古いものに新しい息吹を息づかせる取組……。こうした中で生まれる「喜び」が、今後とも、大森のまちづくりのエネルギーになっていくだろう。

【参考文献等】

町並みづくり物語・石見銀山と生きた産業 西村幸夫
「石見銀山四季暮らしものづくり」
いなとみのえ・織研新聞社
群言堂ホームページ・松場登美の阿部家日記
納川の会ホームページ

▼特定非営利活動法人 納川の会

理事長 河村政二

島根県大田市大森町ハ48番地1

ホームページ <http://www.nousen.jp/>

E-mail info@nousen.jp





石見銀山

